



TITLE:

敗因管見

AUTHOR(S):

柴田, 敬

CITATION:

柴田, 敬. 敗因管見. 經濟論叢 1945, 60(4-6): 25-31

ISSUE DATE:

1945-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/132131>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六·五·四第 卷十六第

敗因管見

柴田敬

乘數分析と加速度原則

木下和夫

行發月六年十二和昭

經濟論叢

第六十卷 第四・六號 (總卷第百五拾四號)

昭和二十年六月發行

敗因管見

柴田敬

一 はしがき

いまさら戦敗の原因を探ねるのは死兒の齡を數へるの愚を敢てするやうなものであるが、慘敗の此の混沌の中から立ち上らうとするに際しては、何としても敗因をつき止めて置かねばならない。

こゝに發表せんとするところのものは、實は、今年のはじめの頃に、日増しに悪化し行く戦局を見つめながら軍にその根本的反省を促さんとしてその最高中樞部に對して相當の覺悟をきめて具申した卑見の一部分の抜き書きに、少しばかり手を加へただけのものである。當時私は、たま／＼軍の内情を仄聞する機會を得て其の真相を多少知つて且つ驚き且つ憂ひ、遂に黙視するにしのびずして、その意見具申書を提出したのであつた。

當時は戦局こそ日増しに不利になつて行きつゝあつたが、われわれはまだ敗れてしまつてはゐなかつた。當時は原子爆彈のことなどまだ思ひもよらぬことであつた。従つて、私が當時考へてゐた逐次的敗退の原因は、最後の戦敗を充分に説明しす盡ものではあり得ない。けれども根本的敗因の關する限り、矢張り同じやうなことが言

はれるのではないかと、私は今も思ふのである。

二 根本的敗因

敗けたのは國民が本當に忠義を盡さなかつたからだ、と或る人が言つた。これに多くの人が共鳴した。此の見た方にはたしかに一面の眞理が含まれてゐる。併し、それでは、米國人はわれわれ以上に忠義をつくした爲に勝つたのであらうか。我が將兵は身を鴻毛の輕きに置いて勇敢に戰つた。此の點に於てわれわれは假初にも米國に劣らなかつた。國民大衆は苦力以下のドソ底生活につき落され、先祖代々の家業を奪はれても別に反抗もせず、指導者達の命に服して銃後を守り生産に精進した。此の點に於てもわれわれは米國に劣らなかつた。にもかゝらずわれわれは敗れたのだ。それでは何故敗れたのであらうか。

人は謂ふであらう、米國が物量の大を恃むを得たのに反してわれはさうでなかつたからだ、と正にさうである。それに相違ないのである。が、だからと言つてわれわれは、米國が勝つたのは人間としての力に依つたのではなく單なる物の力によつたのだから何の誇りにもならない、といふやうな瘡我慢を言つて自己慰安にふけるやうなことがあつてはならない。我々は一步深く問題を堀り下げ、事の眞相を男らしく見究めねばならない。

それは他でもない。所謂物質は精神の單なる反對物ではない。それはそれ自身人間の作つたものであり、精神の作つたものであり、物化された精神である。素手で仕事をするよりも道具の形に自らを物化しそれを通ずることによつてヨリ效果的に目的を達しようとするのも實は他ならぬ精神の作用である。米國は物量にモノを言はせることによつて勝つたのだが、それは單なる物の力に依つたのではなく、正にこのやうな物質尊重的な所謂物質

主義的精神に依つたのである。われわれは此の精神に於て餘りに劣つてゐたのである。

自らを物化しそれを通じて働かうとする精神は同時に、物事を一應客觀的に冷靜に考察しようとする精神であり、物事を一應超主體的に發展させて見る精神である。人生の刻一刻は火華の如き活躍より成るのであるが、その火華の眞直中に居りながら而も其の火華から一步退いた態度で、事態を恰も他人のやうに冷靜に客觀的に見究めつゝ事に處しようとする所謂科學的精神がそれである。物質輕視的なわれわれは此の精神に於ても缺けてゐた。

事態を他人事のやうに冷靜に客觀的に見究めつゝ事に處しようとする此の精神は、自分の眼で見究めるまでは如何しても承知しようと思へ而して自分の眼に斯く見える以上は誰が何と言はうともそれを主張して譲らないガリレオ的精神であり、其の意味に於て自己に絶對の權威を認める精神である。科學輕視的なわれわれは此の精神に於ても缺けてゐた。科學者は、何物にも懼れず屈せず飽くまで物事の眞相を自分の眼で見究めようとすべきであるのに、さうせずに、卑屈にも世俗的な勢力の前に眞理を歪めて曲學阿世を事としたり、外國學者の説を無批判に受容れて只管之を信仰したりした。世間も亦、或はその物質生活や身邊を不斷に脅かして科學者をして世俗的勢力の前に卑屈ならざるを得ざらしめ、或は外國學說の祖述者のみを徒らに尊重して獨白的研究者の勇を挫いたのであつた。

個々人に絶對の權威を認める精神は、個々人の利己的要求の自由なる達成を公然と認める個人自由主義によつて培はれたものであるが、此の個人自由主義は、自己の利己的要求の自由なる達成を主張する如く他人のそれをも動けないやうにしようとする特殊な公德心を呼び起し、又、例へば利己的活動の權化たる株式會社に働く個々人に對してその私的役得や情實に動かされることを戒めひたすら會社本位に行動すべきことを要請する如き特殊な

公的精神の陶冶を行つたのである。個々人に絶對の權威を認める精神に於て缺けるところを持つたわれわれは、正に此の特殊な公德心及び公的精神的陶冶に於ても缺けてゐた。従つて、一度び資本主義の獨占化につれて個人主義が時代後れのものとして批判されるやうになると、我國に於ては、人間に根深く存在する利己心は適當なる公然の捌口を一切封ぜられて簡單に否定され、爲に、利己的活動は闇の世界に潜つてそこに役得や情實の支配を現出し、表面の世界に於ては、利己的反面をいつわり隠せる公的なもののみが通行を許され、正に公的なものであることを理由として傍若無人にふるまふやうになつた。斯くして一部の軍人官僚は自ら階級を異にせる指導者を以て任じ、他を目して濟度し難き頑冥固陋の徒と看做し、無理押しに之を指導せんとした。而も此の事は更に、被指導者達をして卑屈且無氣力ならしめると共に、自任指導者達をして益々獨善的ならしめ、其の識見を啓發せられる機會を斷からしめ、事態の正しき見透しを得難からしめた。殊に軍令系統を排他的に占據し徴兵上の實權を掌握しそれを通じて國民の生命を意のままにする特權的地位を享有せる軍の場合には此の事は愈々甚だしかつた。斯くして「うるさく文句いふ奴は片つ端から召集してやれ」といふやうなとてもないことを口にする者が出て來たりするやうになり、國民は明朗さと潑刺さと眞鍮さとを失ひ、科學者はますます無氣力且曲學阿世的となり、又、「もともと此の戦争は一部の軍人官僚や反動主義者共が國家を口實に自己の榮達を計る爲に乃至は偏狹な短見を不遜且輕卒にも國民に押し付ける事によつて引き起したものであり、此の戦争が續けば續くほど理性を無視し文化と自由とを蹂躪する夫等の輩の横暴を募らせるだけであるから、寧ろ敗北して夫等の輩を米國人の手で艾除して貰つた方が日本の本當の發展の爲になるのだ」といふやうな思想が一部に根強く低迷するやうになつたのである。否、斯うした感情對立は唯に軍對官民乃至軍官對民の間にだけ生じたのではない。官自體の中に

於ても軍自體の中に於ても、到る所に鬱積し、偏狹なる大小幾多の私黨派閥の反目抗争になり、一般軍人官僚の無節操と無氣力と自發的努力心缺如とは救ふべからざる程度になつたのであつた。

物事を飽くまで冷靜に客觀的に見究めつゝ事に處しようにする科學的精神は、他面から之を見れば、物事それ自身の動き方たる法則従つて理論を尊重しそれに隨從せんとする精神である。此の精神こそは近代文明を特徴づけるものの一つであつた。然るに科學的精神に於て缺けてゐたわれわれは當然此の理論尊重的精神に於ても缺けてゐた。従つて、一度び資本主義の變質につれて個人自由主義が行詰り國家的統制が強化されるやうになると、我國に於てはとんでもない出鱈目な場當りの思ひ付き主義が横行するやうになつた。即ち、國家的統制が強化されるやうになると、從來誰でも入手出來た資料ですら關係當局者でなければ入手出來ないやうになる。さうなると、其の當局者は其の資料を握つてゐる爲に、たとへ其の資料の意味するところを理解する専門的素養を持たなくとも、常識的に何とか一應の對策を講ずることが出来るが、局外者は、たとへ如何に優れたる専門的權威者であらうとも、其の問題についての具體的資料を示されないまゝに卒然として意見を求められることになれば、自らピン呆けの判斷をしか下し得ない。そこで必要資料を入手出來る地位にある當局者は往々にして専門的權威者を、従つて専門的學問そのものを、馬鹿にするやうになる。それは恰も、病人を預つた藏醫者が、病狀について充分に報告もしないで名醫に療法を尋ねて見てその診斷が誤つたからと言つて、名醫を馬鹿にし、醫學を馬鹿にするのと同じやうに、馬鹿化したことである。然るに此の馬鹿化したことが我國に於て滔々として行はれるやうになり、出鱈目な場當りの思ひ付きで事に處しようとする風潮が支配的となつたのである。

法則や理論を尊重しこれに隨從しようとする精神は、他方から之を見れば、世間的事物の法則たる法を尊重し

遵守せんとする遵法精神である。此の精神も近代文明を特徴づけるものゝ一つであつた。然るに理論尊重的精神に於て缺けてゐたわれわれは當然此の遵法精神に於ても缺けてゐた。従つて、一度び資本主義的經濟秩序が行つまりその下に於ける法が次第に其の權威を失ふやうになると、我國に於ては、極端に法を輕視する風潮があらはれ、正義觀が地を拂ひ、押しの一手で事を處しようとする傾向が支配的となり、闇行爲が當然のこととなり、軍紀官紀は遲緩して命令は徹底を缺き、下剋上の風が抜き難きものとなつたのであつた。

三　む　す　び

凡そ以上に考察したやうなことが、われわれを慘敗に導いた根本原因である。諸々の作戦の重大失敗も手筈の致命的齟齬も源を糾せば結局右の根本原因に歸するのである。否、それは單に根本的敗因であるだけでなく、そもそもわれわれを此度の戦争に導いた根本原因そのものである。慘敗の此の混迷の中から新しく立ち上らうとするに際してわれわれは、われわれの中に此の根本的敗因を根本的戰因そのものを清算してかゝる覺悟をせねばならぬのである。

併しながら、右に考察した根本的敗因は、さう容易に清算され得る性質のものではない。けだし右に根本的敗因として掲げたところのものは、單にこれまでの軍とかこれまでの官とかだけに伏在するものではなく、日本に於ける軍や官をこれまでのものゝやうに特殊なものとなす國民的體質としてわれわれ國民一般の中に深く根ざして存在してゐるものであり、われわれが根本的にはまだ封建的觀念形態の支配から一向に抜け出してゐないことに因るのであるから。

此の封建的觀念形態は、容易には打破出来ぬ日本の小規模農業を或る程度までその物的基礎として持つものと考へられるのであるが、單にそれだけでなく、その物的基礎を離れてもそれ自身の強靱な生存力を持つものである。此の後者の點は、例へばわれわれの日常用語に顧みてもわかるのである。即ち、われわれは實に複雑な敬語上の差異をあらはす極めて複雑な言葉を特にそれと氣付くこともなく日常用ひてゐるのであり、例へば英語でなら單に you の一字であらばさるべきことを表現する爲に我々は「あなた」とか「君」とか「お前」とか「貴様」とか「貴公」とか「手前」とか等々幾多の言葉を用ひてゐるのであるが、此の用語の多様性は實は封建的觀念形態から脱し切つてゐないわれわれの「物の感じ方」そのものに照應してゐるのである。われわれの此の特殊な封建的な「物の感じ方」こそは、曩に考察した根本的敗因と相通するものである。それは極めて根深いのである。例へば敗因を探ねるにしても、「愛國的なる一面を持つと共に利己的な一面を根強く持つところの國民にその最大能力を發揮させようとすればどんな仕方でも利己心を満足させどんな仕方でもどんな程度まで愛國心に訴へたらよいか、といふことを冷靜に科學的に考究して方策を樹立してかゝねばならぬのにさうしなかつたところにこそ敗因の一つがあつたのだ」といふ風に感ぜずに、たゞ一すちに「敗けたのは國民が本當に忠義を盡さなかつたからだ」と感ずるほどそれほど我々の特殊な「物の感じ方」は根深いのであり、いつまでもわれわれにつきまとつてゐるのである。

慘敗の此の混沌の中から新しく立ち上らうとするに際して何としても清算してかゝらねばならぬわれわれの身中の根本的敗因は、斯くの如く根深いのであり、その清算は容易に行はれることではないのである。われわれは此の事を充分に考慮に入れ、深き決意を以てあたらぬばならないと共に出来もせぬ無理押しをしないやうに順を追ふことに心しなければならぬのである。(昭和二〇・二〇・一〇)